

諸宗勝つか日蓮負けるか

鎌倉の極楽寺の住職良観の居間である。使者らしい若い僧と対談をしていた。

「日蓮坊の消息はどうじゃなあ」

良観が問うた。

「はい。檀家のものを使いまして、日蓮法師の一挙一動をしらべておりますから、ご安心下さいまし」

「さようか、それは頂上至極、近頃は どうしておるのか」

「はい、今は鎌倉におりません。なんでも、噂によりますと甲州か駿州におるとのことでございます」

「ときどき、鎌倉からいなくなる奴じゃなあ。寺一つもつておらん坊主だから、どこへでも、風しだいでは雲のごとく流れて行く奴じゃ。気ままなものよ。だが、日蓮法師が鎌倉におらん時は、例の宣伝をたのんだぞ」

「それはもう心得ております。日蓮法師はまことにふらちな坊主で、正式に当方より問答を申しこむと、急に鎌倉から姿をけしてどこかへいつてしまふ、とこうでございましょう。心得えたもので、それゆえ当方では、今、日蓮法師がなにを考え、なにを企らんでおるかは見通してござい
ます」

「それでよろしい。鎌倉に日蓮法師が帰ってきたなら、当方は、昨日より病氣といつておればいいのだ。して、今度は、なにをしに甲州にいったのであろうか」

「なんでも、富士山に登ったとかの話でございませう」

「ええつ、富士山につ。なにしに登ったのであろうか……」

「そこまではわかりません。まさか、遊山する程のものずきではありませんまい」

「日蓮法師のことだから、富士山の頂上にでも登つて、例の悪口を勢一杯どなりたてておるのであろう。あるいは、早く蒙古よ、日本に攻めてきてくれと、一大祈禱でもしておるかからん。

日蓮こそ、こつちからいえば、亡国坊主といいたところだ」

「御上人さま……」

と廊下に膝まずいて、所化が声をかけた。

「円覚寺から使者がまいりましてございます。みたことのない御坊ですが」

「よい。ここに通しなさい」

良観は、機嫌が大変によかった。

円覚寺の使者というのが、さつそくに良観の前に通された。

「拙僧は、突禪と申す雲水でございます。まことに、突然まいりました。円覚寺の御上人より、その話ならば、自分が良観上人に申し上げるより、貴公が極楽寺にいつて、直々に申し上げますのことで、本日、参上いたしましたものでございます」

「それは、ご苦労さま。話というのは……」

「はい。実は、拙僧は、昨日京都よりこの鎌倉に所用かおりましてまいったものでございます。

例の日蓮法師に関する噂が京都にもございますので、それを何かのご参考にもなろうと、御上人さまに申し上げたく参じました」

「それはまた、結構なお話で……」ここにおる方は念仏の方の御僧侶だが、やはり、日蓮坊主についての消息を、今もってきてくれたところじゃ、だからご安心あつてお話し下されたほうがよい。貴僧がここでご報告して下されば、それはそつくり、念仏宗の方にも伝わるからちようど便利がよい。この使者の話では、日蓮法師は、今鎌倉におらんというから遠慮なく、大声でお話しなさい。これは冗談だがなあ……」

良観の言葉に、突禪も、につこりしながら、報告するのだった。

「実は、日蓮法師が自分の弟子をつかいますて京都に上らせ、公卿たちに接近しようと運動して

おることばでございます」

「ええつ、そりや、本当か……」

良観の顔色が変わった。

「本当でございますればこそ。円覚寺の御上人が、拙僧に良観上人を尋ねて、詳細申し上げてこいとのことなのでございます」

「ううむ。そりや一大事だ、聴こう。お話し下されい、早く」

良観は、もう一人の使者と顔を見合せて、突禪の顔をみるのだった。

突禪は、自分の言葉の効果のあつたことに満足して、突然どころか必然だぞというような顔をするのであつた。

「日蓮法師の弟子の中に、三位房日行というのがございまして、これが京都に上つて、蒙古襲来を師匠ゆずりにわめきたてて、これを調伏する法は、日蓮の法華経でなければならんと、京都中にながりたてたのであります。それは、ち太うど、本年（文永六年）の春頃でございました。この三位房日行という奴は、えらばれて京に上る程の人物ゆえ、なかなか上手にとびまわりまして、言葉なども、何時の間にか、関東の田舎なまりをごまかして、京の言葉を巧みにまねるといふ程の人物でございます。田舎法師が京法師をまねた齒の浮くような人物でございますが、どういふ関係をたよつてか、とうとう関白鷹司基忠さまの持仏堂において、説教をするところま

で、こぎつけてしまったのですから、京中での大評判でございます」

「日行とかいう日蓮坊主の弟子が、関白の屋敷において説教をしたというのか。本当か……まこととは思えんなあ」

「本当でございますとも、説教をした三位房日行もなかなか得意に思い、慢心をいたしました。日行という、自分の師匠たる日蓮法師からもらった日号を、尊成と改名したと申します。ところが、近頃は尊成という名を廃しまして、またまた日行と名乗るので、どういう訳かと調査いたしましたところ、師匠の日蓮坊から、尊成とは、もつたいなくも隠岐島で亡じられたる後鳥羽天皇の実名ではないかと、きつく怒られたということでございます」

「田舎法師が、京に上って、関白の持仏堂で説法したとあつては、そのくらいの慢心は無理もあるまい。して、そこで、どんな説法をしたか、さぐつてみたか……」

「さればでございます。それが、その、某方面からもれ聞いたのでござとますが、いやはや飛んでもない説法しております」

「日蓮法師の弟子じゃから、無論そうであろうが、どんな話だ」

良観は、突禅に話をさいそくした。

「日蓮坊主は、鎌倉の諸大寺の大徳が、去年の末の彼の公場対決の手紙を黙殺されましたので、気でも狂ったのでございませうか。立正安国論を鎌倉幕府に提出した時には天台沙門日蓮とし

て奏状をささげておるようですが、最近では、その天台宗の悪口を弟子にいわせておるようでございます。すなわち蒙古の国が攻めてくるのは、叡山が誇法になったからだと申しておるそうでございます。叡山の誇法とは、もちろん六年前のあの出来事をさすのでしようから、叡山としては日蓮法師に對しましてはそれこそ、ぐうの音もでぬことでございます。」

突禪は良觀の顔をそつと、みながらいうのである。六年前のあの出来事というのを少し詳細に述べると、これは聖人が、御輿振御書という御書に一寸のべておることであるが、叡山の僧侶が道念も信念もない事実をはつきりと示した、前代未聞の話である。

文永元年の三月二十日、叡山の僧侶たちは自分の手で火をつけて叡山の戒壇院、大講堂、法華堂、常行堂を焼いてしまった。もちろん、諸堂宇の仏さまも焼いてしまったのである。先年、叡山の大講堂が小僧の放火で焼失して、金閣寺の焼失とともに、昭和の人びとをおとろかせたが、歴史上からみれば先輩はもつと派手なことをやっておるのだから、大講堂の放火小僧をせめるわけにはゆかないのである。さればこそ、この放火小僧には全山をあげての滅刑運動が起きておるということだから、歴史に照らしてみても、まことに当然な話だと思っておる。

さて余談はさておいて、坊主が、自分の寺に自ら放火しようとは、昭和の人には、その非常識さは理解できぬが、僧兵の歴史で焼きつ焼かれつするのは、日常茶飯事である。それでも、自分から自分の寺を焼くのはその例はたびたびないが、絶無ではないのである。鎌倉時代には、四天

王寺の僧覚順等は本寺を焼かんとして九十余人誅せらるるか、園城寺の僧達は、自分の寺に戒壇建立が不許可となつたのを恨んで、自分の寺の書院、経蔵を焼いたのが、聖人が、安国論を提出した年の文応元年の前年である。

さて、文永元年の叡山の自分達での焼討ちというのは、天王寺の貫主を叡山の方から、上に願いでたのに対して、勅裁がながびいたというのが理由なのである。ここで面白いことが起つた。叡山の僧侶は叡山の諸堂宇を全部自分の手で焼いてしまつたのだから、これは、お寺も仏様もいらないという理屈だ。喜んだのは、日頃の敵たる園城寺側であつた。叡山で戒壇堂を焼いてしまつたのだから、園城寺が、戒壇堂をこしらへたつて文句のつけようがない筈である。叡山と園城寺の仲の悪い原因は、園城寺に戒壇堂をこしらへようとするのを、叡山に戒壇堂があるから、許可しては困るというのが、長年の競いの種なのである。ところが今度は、叡山の戒壇堂が焼けたのであるから、早く既定事実をつくつてしまへと考へて四月二十九日、私設の戒壇堂をこしらへて、権僧正仙朝を授戒の師として、授戒を行つてしまつたのである。

これを風聞した叡山の僧侶は、かんかんに怒つて、お上には仙朝を流罪にせよと強訴するとともに、五月二日には、叡山の大家は大挙して園城寺に押し寄せて、新たに建立したる戒壇堂はもちろんのこと、金堂以下の堂塔房舎をことごとく焼払つてしまい、重宝の梵鐘を戦利品として叡山に持ち帰つてしまつた。この時の焼討ちは、前代未聞で、三日間に渡つて焼き討ちが続き、大

津東西の浦はすべて灰燼に帰したという。戦利品の梵鐘は、鎌倉幕府の命令で、六波羅が取り戻して、園城寺に返してやった。文永四年四月二十八日までには、叡山にあったのである。聖人はこの暴挙を批評して「あるいは、生身の本尊たる大講堂の教主釈尊を焼き払い、あるいは生身の弥勒菩薩（園城寺金堂の御本尊をさす）をほろぼす。進んでは教主釈尊の怨敵となり、しりぞいては、当来出世をあやまたんと狂い候か、この大罪は経論に「いまだとかれず」といわれておる。以上の愚挙は叡山の衆衆にもその後、気になったとみえて、七月二十三日に至り叡山三塔の衆徒が法華経百部を手写して懺悔したといわれておる。

突禪はなおも言葉をつづける。

「叡山の大笑は、叡山三千人の失にあらず、公家武家の失たるべしというのが、彼の日蓮の所論でございます。よって、公卿の筆頭職たる閑白にむかつて、その弟千日行を使つていわせたと申します。日本中、上下万人一人もなく謗法となつたので、大梵天王、帝釈、並びに天照太神等が、隣国の聖人に仰せつけて、誇法を戒めんために蒙古が攻めてくるのである。その例は、支那、朝鮮の両国も、禅宗念仏宗になつたが故に蒙古に攻めほろぼされたのである。国をたすけ家を思わん人びとは、南都の旧宗たる、華嚴、法相、三論、律はもちろんのこと、真言、浄土、禅等を一切禁止し、特に禅宗、念仏宗の寺々はことごとくこれをとりこわし、その僧達を獄屋にいましてしまい、焼けた叡山の大講堂をさつそくに建設して、靈山の釈迦牟尼仏の御魂をいれる

御本尊をつくらねばならない。ことしななければ、日本国守護の八百万神も、日本国に帰ってきてこの国を守護することもなく、諸仏諸菩薩も、この日本の国をすてさるでありましょう。というのが、日行が日蓮法師にしこまれて、閑白の持仏堂において行つた説教の大意でございます」

突禪も、あまりの長談義に、思わず額の汗を手の甲でぬぐうのであつた。

良観は突禪の語り終わるのを待って、落着いていった。

「なる程、日蓮法師のいうごとく、京都の仏法はまったく乱れておる。仏教の統領たる叡山の大衆が、自らわが寺に火を放つて、寺を仏を焼くということは、とりも直さず仏法滅罪の証拠である。しかも、この文永に入つてよりの五、六年、京、奈良においては、僧侶は何をしておるか。仏法の利生を離れて日夜鬭争にあけくれしておる。二つ三つあげてみれば、叡山の衆徒が、わが非を悔いず、三日間に渡つて園城寺を焼き払うだのはつい四、五年前のこと、その後も、一向にその暴力行為をやめることなく、本年（文永六年）の正月十日には、御興を奉じて京に乱入し、六波羅の兵がこれをふせぐという騒動、しかも叡山の僧達の勝手さといえ、その常々かついでは京に乱入する御興を、去年は日吉三社におしかけて、ぶっこわしたり、血をぬつてその御興をけがすということをした。

いやはや、日蓮法師ならずとも、叡山謗法をいうかも分らない。その外正伝寺のぶちこわし、北野神社の閉鎖等々いったらきりなしじや。興福寺や多武峰の連中も、叡山ばかりに暴力行為を

任せておけぬと、神木をもち出して騒ぐやら、多武峰の連中は、御神体の鎌足の木像をかつぎだして奈良から京に入り、関白の屋敷に強訴を企てておるといふ醜態である。文永に入つての、この五、六年の京、奈良の寺々の僧侶のこの暴力沙汰は、日蓮法師がいうがごとく、誇法の証拠かもしれないと、この良観も内心は秘かに憂いておるのである。だが、しかし、以上は京都、奈良のことであつて、この鎌倉とは関係がない。仏の御利生は、京、奈良を離れてこの鎌倉にあると断じることが出来る。なぜならばだ。今この鎌倉には、建長寺、円覚寺、寿福寺、浄光明寺、多宝寺、長樂寺、大仏殿、拙僧の極樂寺の別当、住職はまことに、和合僧の範を示して互いに水魚の思いをなし、お上よりの御祈禱の御依頼にはこの七大寺の和尚をはじめ、その末までがみんな一致協力をしておる現状、京、奈良の僧達が、互いの寺を焼いたり焼かれたりの騒動とは話が違ふ……実はなあ、突禅殿……」

良観は、息をのむと、突禅の顔をにっこり微笑してみながら

「今、えらいことをやっておるのだ」

「えらいことと申しますと、一体、いかなることとございませうか」

突禅が不思議そうな顔をしてきいた。

「実は、執権職北条時宗殿は、弘長元年に秋田城介義景の息女を御内室とされた。しかるに彼の堀内殿が、八年ぶりで昨年御懐胎あそばされたのである。なんとかして男子御出産をといて、お

上の御願いも、もつともなこと、これが昨年暮である。この御祈禱の大將格は、園城寺の長史をわざわざやめて、再び若宮八幡宮の別当職となられた、大僧正隆辨上人である。隆辨大僧正の御祈禱が、今まで、かなわなかったということはかつてないこと、われら七大寺の住職連も、隆辨上人の御祈禱を助けて大衆を列座さすこと七八百人という豪勢さで、近頃になく大祈禱をつい最近も行い、これで、変成男子の大々祈禱を三、四回も行つておる。この祈禱の大きかりは、さすが、日蓮法師の方にももれたとみえて、彼は門下の弟子壇那に「法華経をもて祈らん祈りこそ、真の祈りである。華嚴、法相、三論、真言、天台等の祈らん祈りは、これも仏説のこととて、唯一応の祈りとこそはなれ、終にその効あるべきものではない」と断言したとあるから、見事、こちらの戦法にひつかかつたも同然で、その高言は、この四、五日でわかるところなのだ。今度の祈りは、単に隆辨上人一人の御祈禱ではなく、日蓮のいうがごとく、華嚴、法相、三論、真言、天台ばかりではなく、律宗も禅宗も念仏宗も加えた未曾有の変成男子の大祈禱である。さよって、今この鎌倉では、諸宗が勝つか、日蓮が勝つかと、街々で評判しておるとかいう話であるが、今きけば、日蓮は鎌倉におらず、甲州とか駿州とかにいつておるといふから、この勝敗で恥をさらすのを恐れて、早くも逃げを打つたのかもわからんぞ。まあまああの日蓮法師の高慢な鼻見事打ちくたくはもはや時機の問題だ。こうやつておるうちにも、勝利のしらせがくるかもわからん」

「申し上げます。申し上げます」

この時、あわたましい足音が廊下にした。良観は突禅ともう一人の使者の僧の顔を交々みながら、満足そうにいうのであった。

「おそらく変成男子御祈禱成就の吉報であろう。ともにきこうではないか。はははは……」

良観は、おだやかな笑い声を立てるのだった。

「申し上げます。只今、使いが参りました」

廊下から、所化が良観に底頭しながら告げた。

「で、どうした。祈願成就であろうなあ。日蓮法師がさぞ、がっかりすることであろう。早くいえ、いえ」

「それが……その」

所化は、良観の機嫌をそんずることを恐れて、一寸口もつた。

「なぜいわぬ。この御兩人にも、吉報をきかせてやってくれ。母子とも御健全か」

「はい、母子とも御健勝の由にございます」

「それはよかった。めでたい。めでたい」

「ではございますが、御姫様御誕生でございました」

「馬鹿もの、さがれさがれ。なぜ、それを早くいわぬのじゃ」

鎌倉中で一番おとなしいと評判された良観も、修行には限度がある。思わず、人まえも構わずど鳴らずにはおれなかった。

諸宗が負けて、日蓮が勝ったのである。

